コラム

柿の実三つとお蔭様

株式会社　熊谷組　代表取締役会長　大田　弘

東日本大震災はバブル期以降、拝金主義、節操の無い競争主義に突き進んだ日本の社会の価値観を根底から問い直した。幸せの意味、成長の定義さえも今、改めて考え直されている。際限のない欲望と云う名の暴走列車の行き着く先は明らかだ。

このような混迷の時代にこそ社会の風潮に流されることなく、一旦立ち止まって我々の社会活動の足元、舞台装置である日本の生い立ち・国土・文化と云うものを見つめなおさなければならないのではなかろうか？そして、人は共に助け合って生きていることを行動の基本中の基本に置いて、お互いの持ち味を尊重し、それらを活かした力の合わせ方へと再び立ち戻るべき歴史的局面に遭遇しているのではなかろうか。

日本には素晴らしい格言がある。「駕籠に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」という言葉だ。悪天候の時に駕籠に乗る人が担ぐ人に対して「もたもたせずにさっさと担げよ！日当を払っているだろう」という態度に出るとどうなるか。担ぎ手は「分かりました。担ぎゃいいんでしょ、担ぎゃ！」と、乗り心地を全く気にとめなくなる。草鞋の作り手が明日は悪路になるから、いつもより丈夫な草鞋を作っていて、少し納入が遅くれた。そんな時、担ぎ手が「納期遅れとはどういうことだ！」と一括したら、作り手は担ぎ手の事を慮る気持ちは萎えてしまう。

逆に、乗り手が担ぎ手の体調を気遣って「今日はちょっと疲れているようだから、俺も降りて一緒に担ごう」と云う。みんなで力を合わせるというのは、そんな気持ちの持ち様から始まるものだと思う。いろんな人の力によって籠は前に進んでいるのだ。

昭和 30 年代、私が小学生の時、祖母が柿の木を指さして、次のように言った。

「あそこに柿が三つなっている。一つは食べて良い。もう一つは鳥にやる、そして最後の一つはそのままにして土に帰すんだよ」

人は「自分だけの力」で生きているのでもなければ、「今、現在だけ」を生きているのでもない。自然の恵みを享受しながら、自然の懐に抱かれながら、また、先人達が苦労して築き上げた財産を使わせてもらいながら生きている。

そういう「有り難さ」「お陰様」の気持ちを忘れてしまうと、「柿の実三つ」を全て自分だけで食べてしまいたくなる。「柿の実ひとつ」は土に帰さなければ「いずれ柿の木は枯れる」ことになる。「ひとつは鳥に食べさせなければ」人間の一人勝ちになる。その結末は明らかだ。

今、祖母の言葉が私の頭の中で焼きついて離れない。我々は長い歴史の中で“ほんの一区間のランナー”に過ぎない。前の区間を走った先輩たちが繋いでくれた「汗の染み込んだ襷」。お互いに見えない所、気付かない所で、助け合いながら「団体戦」で走っているのだ。こうした気持ちが根底にあって、初めて切磋琢磨、競争する意味が生まれるのだと思う。

最後に関東大震災の復興に尽力した後藤新平の言葉を紹介したい。『金を残して死ぬものは下だ。ものを残して死ぬものは中だ。人を残して死ぬものは上だ』

以上が“ＣＮＣＰ”に大きな期待を寄せ、賛同する所以である。　以上